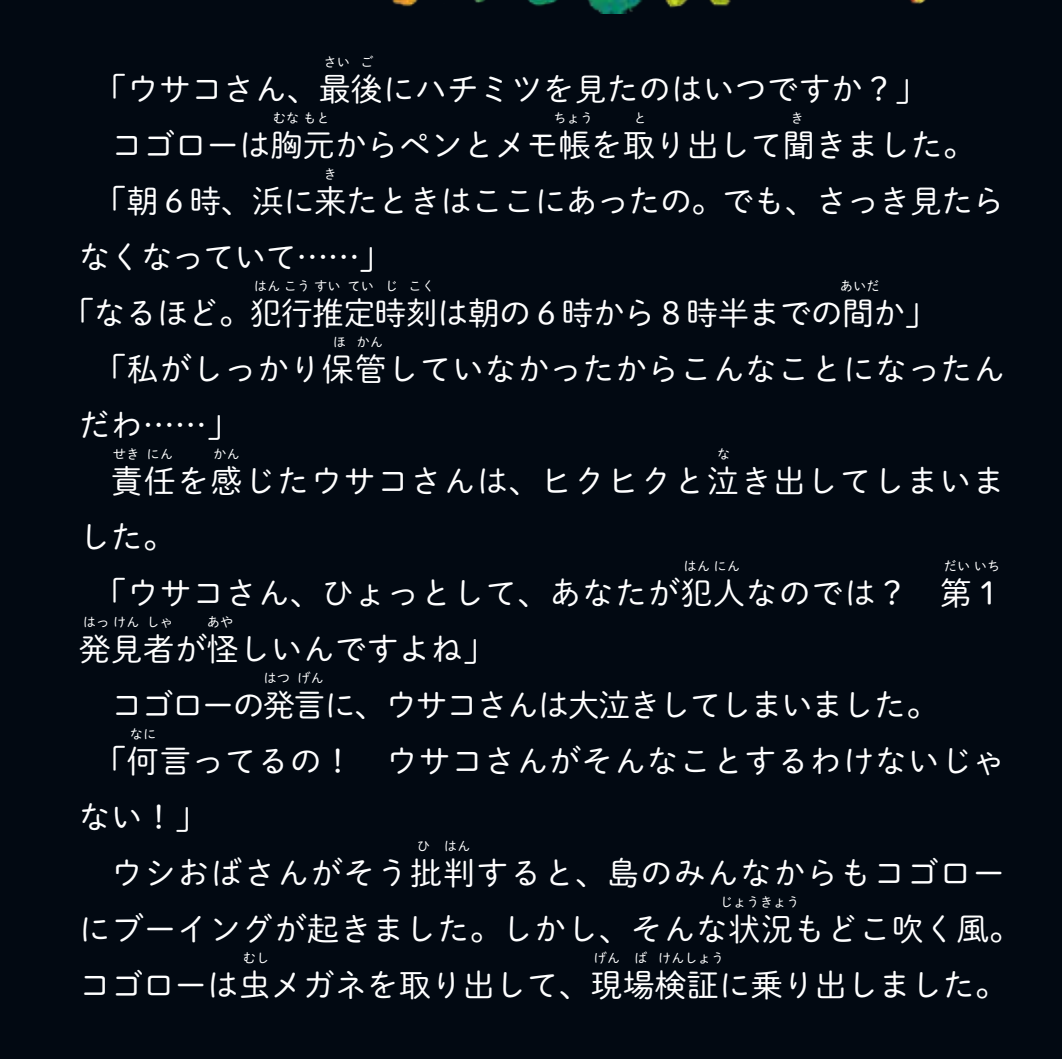
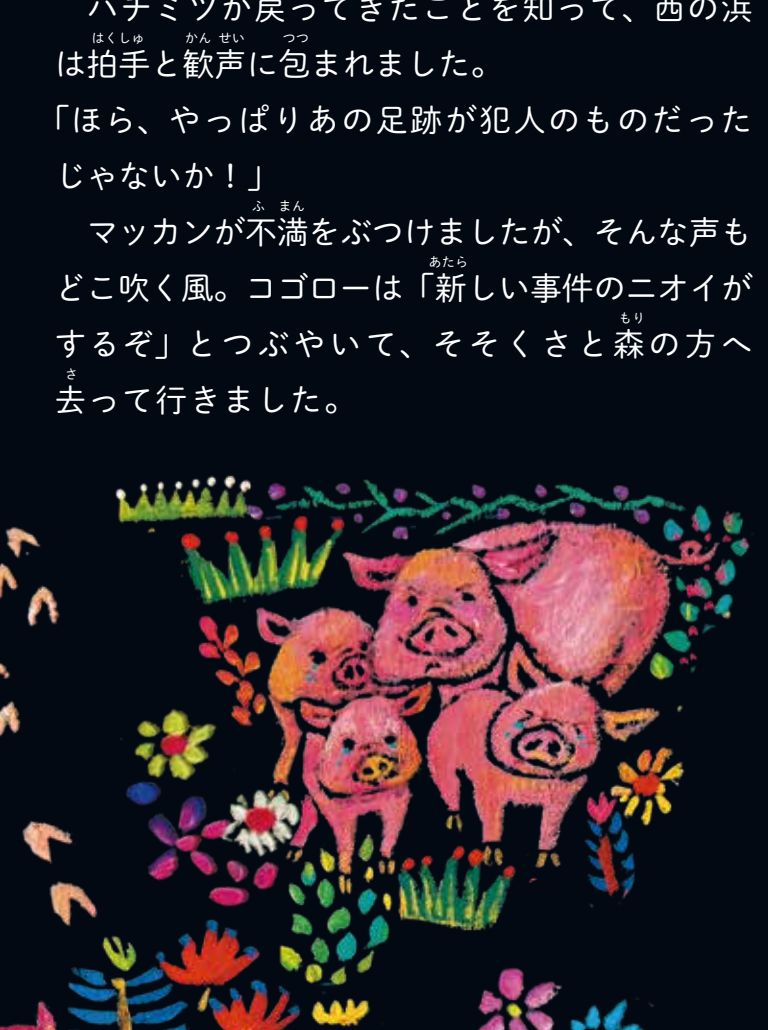
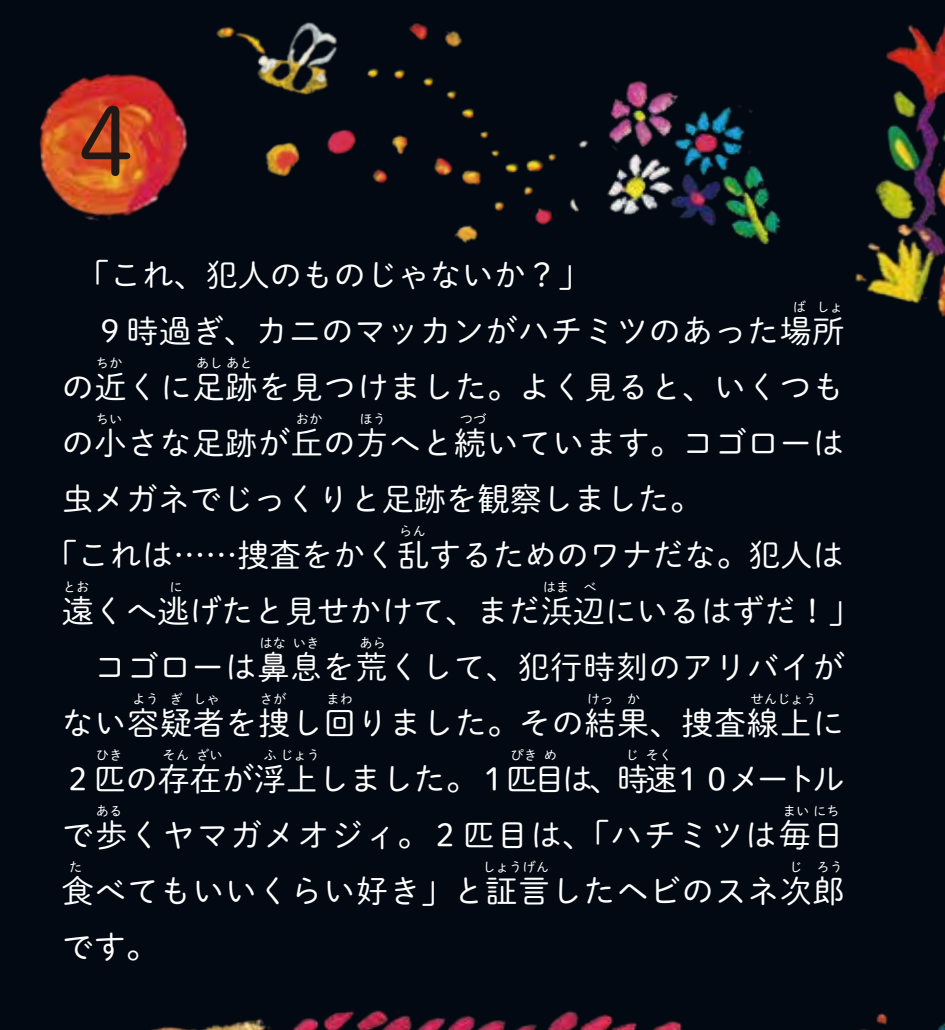
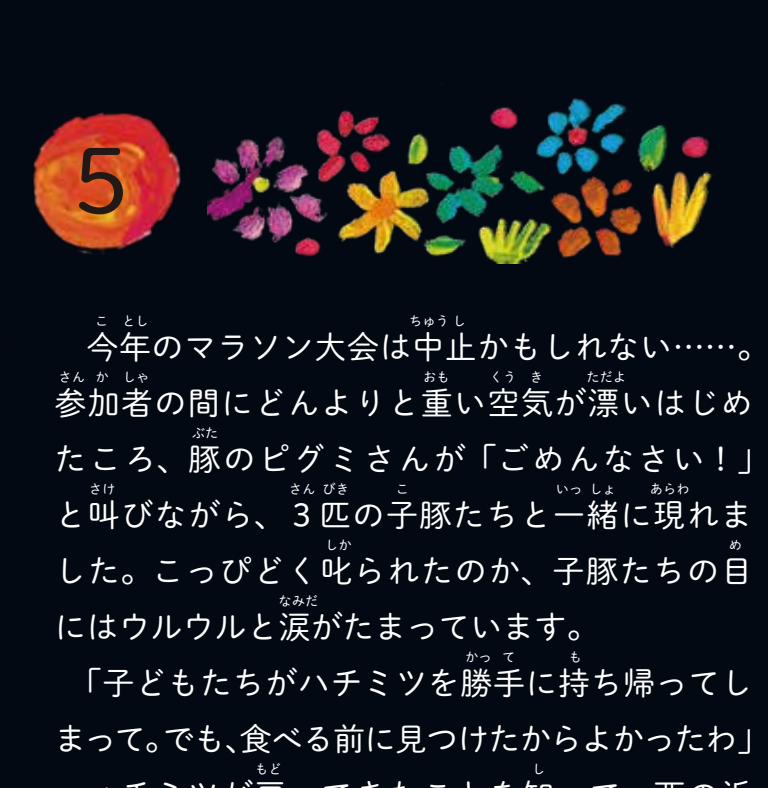


第7話 うりずん南風篇
迷探偵コゴローの事件簿



1 お元気ですか。4月に入ってから、風の島はぶるぶると潤いはじめた。赤や黄色、紫、水色の花々が咲いて、風がサーっと吹くと、花たちが踊っているように見えます。私はガジュマルの木の下で、雨音を聴きながら、新芽がポツポツと出てくるのを観察するのが好きです。

うりずん南風が吹くこの季節、島ではミツパチたちが大忙しです。日の出から3時過ぎまで、花から花へ飛び移って、蜜を集めては巣へと帰って行きます。100種類以上の花の蜜がブレンドされたハチミツは夢のような甘さで、少しなめただけで、体いっぱいに幸せが広がります。

そんな絶品のハチミツを巡って、島ではマラソン大会が開かれます。西の浜から城山の頂上へと続く7キロのコースを完走すると、景品のハチミツがもらえるんです。でも、この前、景品のハチミツが盗まれる事件が起きて、「迷」探偵のコゴローが捜査に乗り出したんです……。

2 「大変！ ハチミツがなくなっているわ!!」

朝8時半、マラソン大会の運営委員をしているウサコさんの声が西の浜に響き渡りました。突然の出来事に、号砲を待っていた島のみんなは騒然となりました。ハチミツがなければ、マラソン大会は成立しません。

20分ほど手分けして探しましたが、ハチミツは見つかりませんでした。

「これは事件だ！ オレが解決してみせる！ じっちゃんの名にかけて！」



「ウサコさん、最後にハチミツを見たのはいつですか？」

コゴローは胸元からペンとメモ帳を取り出して聞きました。

「朝6時、浜に来たときはここにあったの。でも、さっき見たらなくなっていて……」

「なるほど。犯行推定時刻は朝の6時から8時半までの間か？」

「私がしっかり保管していなかったからこんなことになったんだわ……」

責任を感じたウサコさんは、ヒクヒクと泣き出してしまいました。

「ウサコさん、ひょっとして、あなたが犯人なのでは？ 第1発見者が怪しいんですね」

コゴローの発言に、ウサコさんは大泣きしてしまいました。

「何言ってるの！ ウサコさんがそんなことするわけじゃない！」

ウシおばさんがそう批判すると、島のみんなからもコゴローにブーイングが起きました。しかし、そんな状況もどく吹く風。コゴローは虫メガネを取り出して、現場検証に乗り出しました。

「これ、犯人のものじゃないか？」

9時過ぎ、カニのマッカンがハチミツのあった場所の近くに足跡を見つけました。よく見ると、いくつもの小さな足跡が丘の方へと続いています。コゴローは虫メガネでじっくりと足跡を観察しました。

「これは……捜査をかく乱するためのワナだな。犯人は遠くへ逃げたと見せかけて、まだ浜辺にいるはずだ！」

コゴローは鼻息を荒くして、犯行時刻のアリバイがない容疑者を捜し回りました。その結果、捜査線上に2匹の存在が浮上しました。1匹目は、時速10メートルで歩くヤマガメオジ。2匹目は、「ハチミツは毎日食べてもいいくらい好き」と証言したヘビのスネ次郎です。



「いや、この足跡を追った方が早い気がするよ」

マッカンはコゴローに何度もそう伝えましたが、そんな助言もどく吹く風。コゴローはヤマガメオジとスネ次郎の口元を虫メガネで観察しながら「自白するなら今のうちですよ！」と迫りました。



5 今年のマラソン大会は中止かもしれない……。参加者の間にどんよりと重い空気が漂いはじめたころ、豚のビグミさんが「ごめんなさい！」と叫びながら、3匹の子豚たちと一緒に現れました。こっぴどく叱られたのか、子豚たちの目にはウルウルと涙がたまっています。

「子どもたちがハチミツを勝手に持ち帰ってしまつて。でも、食べる前に見つけたからよかったわ」

ハチミツが戻ってきたことを知って、西の浜は拍手と歓声に包まれました。

「ほら、やっぱりあの足跡が犯人のものだったじゃないか！」

マッカンが不満をぶつきましたが、そんな声もどく吹く風。コゴローは「新しい事件のニオイがするぞ」とつぶやいて、そそくさと森の方へ去って行きました。



風の名
うりずん南風 (うりずんパー)

うりずんの頃に吹く南風。うりずんは、沖縄の3～4月ごろの季節だよ。この時期は雨が降り大地を潤わせ、植物たちの芽が出る季節と言われているよ。